たまのよこやま

発行
㈶東京都生涯学習文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1-14-2
☎042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報　No.60　平成16年3月25日　http://www.tef.or.jp/maibun/

元八王子鍛冶屋敷遺跡5号住居跡の出土遺物

埋蔵文化財と経営理論

調査研究部長　青木知絵

埋蔵文化財と経営理論の話？商品を販売する訳ではありませんが、多くのお客様をセンターでお迎えするためには重要な関連性があります。センターでは、埋蔵文化財の発掘調査を行うと同時に、都民の皆様に向けて埋蔵文化財に関して、お知らせをする目的があります。年間を通じた展示や各種行事により、社会科学習や生涯学習等に役立ちたいと思っています。

経営理論のマーケティングはユーザーが求めるものを把握し、商品や販売方法を決定し、生産者からユーザーへの流通を円滑にします。より多くのお客様を迎えるためには、同じことが言えます。一般的に経営理論の基本で「Need(ニーズ)必要なものが不足している状態→Want(ウォンツ)特定の物が欲しいと思い満足したいと思う欲求→Intention(インテンション)特定の物を手に入れようと意志決定→Action(アクション)行動を起こす」消費者行動の、流れがあります。また、「Attention(アテンション)注意を引く→Interest(インタレスト)興味を呼び起こす→Desire(デザイア)欲求に結びつける→Memory(メモリー)記憶させる→Action(アクション)行動させる」法則により、生産者は流れを作らなければなりません。一方、ニーズの満足のため、生産者には技術的基盤が必要となります。

センターでは、皆様の目に留まり、興味を持ってもらい、記憶され、行ってみようと行動に移して頂けるよう専門性の充実はもとより様々なノウハウを蓄積し努力したいと思っています。

遺跡だより㊽

武蔵国分寺跡関連遺跡（武蔵台西地区）

武蔵国分寺跡関連遺跡はその名が示す通り、国指定史跡の『武蔵国分寺跡』を中心としており、遺跡は府中市と国分寺市両市にまたがる約2㎞四方の広大な範囲に及んでいます。南側には武蔵国庁（国の役所）が置かれていた「武蔵国府関連遺跡」があり、この付近一帯は古代武蔵国の中心地となっていたところです。地理的には多摩川の支流である野川上流域に位置していますが、この地域は都内でも旧石器時代や縄文時代の大規模な遺跡が数多く分布するところとしても知られています。

発掘調査の対象となった武蔵台西地区は、都市計画道路の建設工事に伴って、平成12～15年度にかけて調査が行われました。調査範囲は遺跡の北西端にあたり、武蔵野台地南西部の国分寺崖線を挟んで、低位の立川段丘面から高位の武蔵野段丘面にかけての場所です。本遺跡については以前、平成12年度の発掘調査成果を、本誌№52で紹介したことがありますが、今回は発掘調査の終了を受けて、調査成果の中でも特に注目された事項を中心に紹介いたします。

武蔵台西地区の調査では、旧石器時代から縄文時代、古代、近世以降に至る数多くの遺構と遺物が検出されており、長い間にわたりこの場所が人々の生活と密接に結びついていたことが判りました。この中では特に、旧石器時代や縄文時代を中心に大きな成果が上げられています。

旧石器時代の遺構・遺物は、国分寺崖線上の武蔵野段丘面を中心に検出されており、立川ローム層上部のⅣ層から下部のⅩ層にかけて、7枚の文化層（遺構・遺物の検出される層）が把握されており、数多くの遺構群や石器群が検出されています。特に最下層にあたるⅩ層から検出された遺構と石器群は注目されています。遺構では炉跡状遺構や、火を使用した痕跡と考えられる炭化物集中部が発見されています。出土した石器には、刃部を磨いた局部磨製石斧・打製石斧・鋸歯縁状石器・ナイフ状石器・石核・剥片・砕片などがあります。これらは今から3万年以上前の後期旧石器時代初め頃のものと考えられており、武蔵野台地では最古のものとなっています。同じ崖線上には、Ⅹ層の資料が数多く検出された府中市武蔵台遺跡や国分寺市多摩蘭坂遺跡などが隣接しており、その関連性が注目されています。

立川ロームⅩ層出土の石器

また、約2万4千年以上前に堆積したと考えられている姶良・丹沢火山灰層（ＡＴ層準）の下位から、土坑1基が検出されています。旧石器時代の土坑は調査例が少なく、東京都内では現在までに9遺跡で12例ほどしか発見されていません。本遺跡で検出された土坑は、その中でも最古の時期に位置付けられるものです。

縄文時代の遺構・遺物は、旧石器時代に比べてあまり多くはありませんでしたが、国分寺崖線直下の立川段丘面からは本地域周辺で発見例の少ない草創期（縄文時代の初め頃）の石器集中部が検出されており注目されています。残念ながら土器の発見はありませんでしたが、多数の槍先形尖頭器（石槍）・剥片・砕片のほかに石器の製作に使われたハンマーも出土しており、槍先形尖頭器の製作跡であったと考えられます。

縄文時代草創期の石器

平成12年度から続けられてきた本遺跡の調査も、この2月ですべて終了となります。出土した遺物や記録類はすべて府中市に移管され、今後は将来に向けての保存と活用が図られることになります。

（川島雅人主任調査研究員）
（大西雅也調査研究員）

文化財講座〈50〉

くろがね物語　―弐―

古代の農具〈上〉

日本列島に本格的な稲作文化が登場したのは、弥生時代のごく初期の頃とされています。同時に、水田耕作に伴う農具や技術も、大陸から伝来したとみられています。

農具には、土を掘り起こし、耕すための鋤（すき）や鍬（くわ）、作物を収穫するための鎌や穂摘具（ほつみぐ）などがあります。鉄製の農具は弥生時代後期には東日本にも伝わり、古墳時代以降、各ムラに普及したと推測されています。

鋤は身に対して、平行か、鈍角に柄をつけた道具で、土を深く掘るのに適しています。長い柄付きの、現代のスコップにちかい形をしています。これに対して、鍬は身に対して直角ないし鋭角に柄を装着した道具で、土を打ち、引くことで、おもに土地を耕す機能があります。鍬にはさまざまな種類のものがあり、身の形態によって平鍬（ひらぐわ）や横鍬（よこぐわ）、又鍬（またぐわ）等に分類されています。

多摩ニュータウンNo.949遺跡からも、一木製の鋤が数本発見されていますが、これらは粘土の採掘に使用されたものです。

五～六世紀頃から、刃先にはU字形のソケット式の鉄刃が取り付けられるようになり、奈良・平安時代にも同種の鋤・鍬先が村落から出土します。出土数が限られることから、貴重な農具だったのかもしれません。木の刃から鉄刃への技術革新は、農地ばかりでなく、丘陵地の開拓にも大きな威力を発揮したことでしょう。また、これらの農具は農閑期には土木用具として、竪穴住居（建物）や用水路の掘削をはじめ、墳墓の造作などにも頻繁に使われたと考えられています。

（松崎元樹主任調査研究員）

保存科学室こぼれ話（二四）

木製品の保存処理について

前回は、水浸木材を厚さで分類して保存処理をする話をしました。

ここでは、丸の内三丁目遺跡での実例を紹介します。この遺跡は、千代田区丸の内三丁目5番1号の旧都庁跡地内で現在の東京国際フォーラムに所在し、発掘調査は平成4年1月から10月31日まで、整理作業は同年11月1日から平成6年3月31日まで行いました。

調査区からは、日比谷の入江の埋め立てや屋敷地跡に伴い多量の陶磁器類や金属製品とともに約9千点の木製品が見つかり、その中から当面報告書に掲載する資料として約700点が選択されました。

この当時の問題点は、保存処理期間が1年間かかると整理・報告ができないため、4月から半年間で終了させることでした。そのため前回紹介した方法を採用し、漆器類・下駄類・櫛・荷札類など厚さ5㎝以内の木製品は、約一ヶ月ごとに濃度の高い容器に移動する方法で対応しました。

また同時にPEG4000は、常温では約50％までは液体で60％ぐらいから固化し始める性質を利用し、20％から50％までは常温で、60％から含浸装置内の容器に移動して含浸しました。なお含浸装置内の100％の容器には常に新しいPEGを溶かし、木製品を取り出した段階で順次低い濃度の容器にPEG溶液を移動して濃度を調整します。

このように木製品を低濃度から高濃度のPEG溶液に移動する過程で木材中の汚れが外部に抜け出し、100％の段階では木材中に含まれた汚れは殆どなくなります。そのため溶液から取り出して表面を雑巾掛けすると仕上げの状態になり、その後の写真・実測の作業が円滑に行えるようになりました。

なお、これらの資料は、平成8年秋の江戸東京博物館企画展「掘り出された都市」で一般公開されました。

（上條朝宏主任調査研究員）

丸の内三丁目遺跡出土の木製品

文化財講演会

第4回は11月15日（土）

東京大学総合研究博物館助教授西秋良宏氏が「前田耕地遺跡と同じ頃の西アジア」と題し、西アジアの古環境や土地利用の様相及び生活様式の説明などを最近の調査例を交えて話をされました。参加者は、121名でした。

第5回は1月14日（水）

当センター主任調査研究員比田井民子が「多摩ニュータウンの後期旧石器時代遺跡の成り立ち」と題し、南関東地域の河川と地形の関係及び植生との時代的な背景と遺跡の立地、分布を触れながら、多摩丘陵に認められる後期旧石器時代の様相について紹介しました。参加者は過去最高の212名でした。

第6回は2月18日（水）

当センター主任調査研究員原川雄二が「多摩ニュータウンの石器―縄文時代を中心に―」と題し、多摩ニュータウン遺跡群における縄文時代の石器の特徴や分布などを中心に、また石器のもつ特性や機能などの話がありました。参加者は210名でした。

展示説明会

12月20日（土）第4回の展示説明会は年末にも関わらず、47名の参加者がありました。展示ホール内の展示説明が中心でしたが、会議室において各時期の土器や石器の本物を実際に持って、触れる体験をしていただきました。日頃は、展示品を見るだけなので、皆さんは初めての体験で感激された様子でした。

展示説明会の様子

江戸開府400年記念 文化財講座「江戸遺跡から学ぶ」

江戸開府四百年記念文化財講座は『江戸遺跡から学ぶ』をテーマとして、「大名屋敷の変遷」「江戸の火事」「江戸の上水」「江戸のゴミ」の4回を当センター調査研究員による江戸の遺跡調査で分かる土地利用や暮らし向き、エコロジーに関連する興味深い講座で、参加者の皆さんは熱心に聴き入ってました。

参加者は4回で六百名を超す盛況ぶりでした。来年度も文化財講座を予定しておりますので、ぜひご参加下さい。

平成16年度　広報普及事業のご案内

行事名	対象	日時		備考
映画鑑賞会	午前：小中学生 午後：一般 各120名	4月10日（土）	10：00～12：00 10：00～12：00	無料
縄文土器作り教室	一般：25名	5月8日（土） 5月9日（日） 5月29日（土）	9：30～16：00	往復はがきで申込み 4/12（月）必着 参加費　1,000円
展示説明会	参加自由	6月12日（土）	10：00～11：00 13：30～14：30	午前午後　同内容 無料
もようをつくろう ―土器模様原体作り教室―	一般：20名 親子：15組	6月26日（土）	10：00～12：00	往復はがきで申込み 6/15（火）必着 参加費　有料
拓本教室	一般：20名 親子：15組	6月26日（土）	13：30～16：00	往復はがきで申込み 6/15（火）必着 参加費　有料

平成16年度 広報普及事業のご案内

平成16年度の広報普及事業は、既存の事業の他に「もようをつくろう」や「拓本教室」等の体験教室型の新規事業を行います。

また、夏休み期間には、親子を対象にした「縄文土器作り教室」と、新たに「考古学相談室」を設けますので、どうぞご参加ください。

秋には、当センターが発掘調査を行っている各遺跡調査の「発掘調査発表会」や汐留遺跡の特別展等も行います。

恒例の文化財講演会は7月14日から行います。

各事業とも、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

〔表紙写真解説〕

鍛冶屋敷遺跡は縄文時代中期の集落跡で、住居跡や墓跡等が多く発見されています。

5号住居跡では床面上の数箇所で焼土の塊が検出され、その上にまとまった土器が多量に捨てられています。住居を廃絶する際、火を使用した儀礼が行われた痕跡かもしれません。

（松井和浩調査研究員）

R100

古紙100％配合の再生紙を使用しています。